

ルドベキアの花束

宇宙律

- 一、存在尊重の原則
全ての知的生命体の存在は、理由なくして否定されてはならない。
- 二、選択の自由
如何なる種族・個体も、自己の進化・思想・存在形態を自ら選ぶ権利を持つ。
- 三、干渉の非推奨
高度文明は未発展文明への干渉を原則として禁止される。
- 四、終焉権
個体が自己の終焉を望む場合、それを尊重すべきである。
- 五、情報均衡の原則
知識・技術は平等に共有されるべきであり、過度な独占は禁じられる。
- 六、律外存在の記録義務
宇宙律外が存在が確認された場合、必ず中枢議会に報告せねばならない。

煉獄法

第零条 意義

煉獄の使命は、宇宙律の理念を守ることであり、律文そのものに縛られない。

第壹条 死の容認

死を必ずしも悪とせず、*“死によつて救われる存在”*には終焉権を与える。

第貳条 律違背者排除権限

明確な宇宙律違反者または律の歪曲を試みる存在を独自の判断で裁く権限を持つ。

第參条 煉獄裁定の絶対性

煉獄による緊急裁定は、宇宙社会の通常法を超えて適用され得る。

第肆条 制限的介入許可

非干渉条項に違反する場合でも、その文明が崩壊寸前の場合、介入が許される。

第伍条 戦争非介入

煉獄は戦争を正義と悪の混濁と捉え、絶対的な正義の定義が不可能であると判断する。そのため、煉獄は全ての戦争に非介入とする。

但し、戦争に関わる全ての組織の要請があつた場合に調停の立会人となる。

又、その戦争が宇宙社会に致命的な損害を及ぼすと判断した時、殲滅を実行する。

目次

秩序の章〈Cosmos〉

壱、我らが命は霧と共に、我が命はここに在り

弐、重い愛／重い想い

参、大規模闇市 快樂の再来にて

混沌の章〈Chaos〉

肆、永劫の果てに、再び

伍、ルドベキアの花束

秩序の章〈Cosmos〉

——宇宙の秩序は保たれ、正義は執行されていた。

壹、我らが命は霧と共に、我が命はここに在り

太陽系近辺に位置する宇宙最古にして最大の宇宙ステーションは、比較的地球に近い造りになっている。この宇宙ステーションは、起源たる地(Roots of Space Elements)を短縮してROSEと呼び、人々は親しみを込めてDear ROSEと呼ぶ。

最古の宇宙ステーションであるが故、遠心力を用いて重力を発生させていると言う原始的な機構を持つが、その中は最新の科学技術を駆使した機能が多量に存在する。

また、最大の宇宙ステーションであると言う理由は、初期に造られたため、宇宙ステーションの最適な大きさが解らなかつたからだと言われる。この起源たる地は半径が6,300メートル程あり、更に地球と同じようにその周りは大気の層が生成され、その大気は酸素、窒素、二酸化炭素、アルゴンや炭酸ガス等の混合物——詰まり空気——が一・三、四倍ほどの広さに広がる。

数々の数値から分かる通り、この起源たる地は地球をモデルに造られているのだ。

現在、地球は人類に相当する生物は棲んでおらず、観光惑星となっている。そのため、地球人と呼ばれている人種はこの起源たる地に移住し、定着したり、現在では様々な惑星へと移り住んでいる。

起源たる地は定住する人々が住む居住区、中枢たる政治・制御区、食糧栽培区、宇宙船が停泊している格納区、宇宙船が離着陸する航空区、旅人が休む旅人居住区、娯楽区、自

然觀光区などに分かれているが、その中でも一際特殊なのが「煉獄区」であろう。

犯罪取締ギルド通称《煉獄》。

現在、一一一のエリアにまたがるこの宇宙社会の正義を司る組織である。そのトップである煉獄総帥の座す場所が、この煉獄区なのである。この起源たる地で常に慌ただしく騒がしいのが、居住区でも娯楽区でもない、この煉獄区だ。

各地の宇宙ステーションには時間が設定されている。十二時間を単位に、昼の十二時間はステーション内の明かりは明るく、夜の十二時間帯になると暗く光量を調節する。この時間を《基準時間》と呼び、全ての宇宙ステーションで同じ時間の流れを採用している。

勿論、各惑星では恒星との距離や自転の傾き、自転の速さによって日の出・日の入り、季節の有無、一日の長さなどが違う。だからこそ、宇宙ステーションは統一規格の時間が採用され、そしてそれが宇宙標準時間とされている。

そして前述の通り、基準時間があったとしても、さまざまな時間を刻む宇宙全体の犯罪を取り締まる煉獄区は、昼夜問わず騒がしい。

今日も煉獄のトップである総帥の元へ、直属部隊の將軍——ツジ籤がやつてくる。

籤は扉を開き、執務室に入るなり、挨拶もそこそこに要件を伝えるのだった。

「なあ、ウル。惑星デイズイアントファジー逸脱した曖味のクローン工場の件、聞いてるか？」

「勿論だとも」

現煉獄総帥の名はウルファルト・ゼノファスと言う。彼の直属部隊の將軍とは友人のよ

うな関係を築いており、將軍は部下であつても彼のことを「ウル」と愛称で呼ぶ。

煉獄総帥の部屋は、扉を開いて目の前の最奥に立派な総帥席があり、その前にテーブル一つを挟んで、向かい合うようにソファが置かれている。

ウルは籤に目の前のソファに座るよう促す。

「俺たち〈十二進〉を製造する煉獄提携クローン工場だ。それなのに、ここ数年逸脱した曖昧産のクローンが闇市で多く出品されるようになっていた。流石にこれは見過ごせない」籤はそう言つてソファに座り、辺りを見回す。「ルネは何処行つたんだ？」

ルネ——ルネサク羅斯は煉獄総帥専属オペレータである。彼女はウルが拾つてきた少女で、ウル独自の判断でオペレータとして煉獄に配属されている。いつもはウルの部屋で仕事をしたり書物を読んでいることが常なのだが、珍しく姿が見えない。

「概要はルネからも聞いている。これから逸脱した曖昧のクローン工場に視察に行くんだらう？ 俺も一緒に行こうと思つてな。ルネに船を手配してもらつている。どうやら優秀な操縦士が確保できたとかで、今日が初めての業務らしい」

「新しい操縦士か」

総帥と言う立場上、この宇宙社会が大規模になつてから歴代の総帥は現場——戦場に出るに行くことは殆どなかった。だが、ウルは元々戦闘を好む性格のようで、何かと理由をつけて籤に同行するのだつた。

「クロノ・トラベル社からの出向とのことだ。非常に腕が良く、煉獄の操縦士試験を一発

で合格したと聞く」

「マジか」

煉獄の操縦士試験は難関で有名だ。スクールで専攻して学んでも一発で受かることは稀である。宇宙を股にかけるクロノ・トラベル社の人間であり、実務経験が豊富でも難しいだろう。特に、煉獄で扱うものは戦闘機が多い。それらは一般企業であるクロノ・トラベル社で扱うはずもない。

「一応、総帥おれ専属らしいが、折角の戦力だ、遊ばせておくのも勿体無い。籤も使つてやつてくれ。ただ、ルネ曰く——性格に難ありとのことだが」

籤は自席に座るウルに視線を向けた。籤は業務時間中はニューラル・バイザーを介してデジタル情報にアクセスする。デバイスを操作して検索をするも、まだ煉獄隊員としては登録されていないらしい。

「だが、任務には支障がないんだろう？」

籤が答えを求めるようにそう問うが、ウルは暫しの沈黙ののち、「これから確かめよう」と言うのだった。

暫くすると、ルネサクロスが部屋の認証を通過してやってきた。

雌個体用の軍服に身を包む、髪の毛の長い少女である。本来であればこんな場所にいるはずもない年齢だろう。まだ、幼いと言つてもいい。

「ウル。準備ができたわ」そして籤の存在を認識する。「籤。よろしくね」

ウルは軽く返事をする、壁に掛けてあつたマントを羽織り、ルネサクロスの横を通つて廊下へ出た。それに籤も続く。

「行つてらっしゃい」

彼女はいつも心配そうに見送るのだが、それは仕方がないことなのかもしれない。煉獄が出向く先は、何らかの犯罪に関係することが殆どなのだから。

航空区にはウルの到着を待ち望むかのように、煉獄のロゴが入っているやや小型だが立派な船が用意されていた。ウルと籤は開いている入り口から入り込む。

数人だけが乗れる小さい船のため、入り口から入つてすぐに操縦室コックピットに到着する。そこには一人の——華奢な外見の人物が居た。

「お前が新入りか」

ウルは操縦席に座る見慣れない人間に声をかけた。髪は肩より少し長く、二つに分けて三つ編みにして前方へ垂らしている。きつちりと男物の軍服を着こなしているが、何か違和感があつた。

「新入りです！」

彼が軽快に応える。

「名は」

「コードネーム〈M.I.A.〉。旅行会社クロノ・トラベルの船乗りだよ」

「おー、両性体か？」

中性的な声から、籤は尋ねる。

「そうだよっ！」

一般的に両性体の人間は空間認識力が高いと言われて居る。前々から募集はして居たのだが、中々見つからなかったのだ。出向と言う形であっても、煉獄総帥の操縦士としては申し分がない。

「ほらっ！ 総帥さんも將軍さんも座って座って！ 出発するよー！」

その軽快な物言いは、彼の種族としての性質なのか、はたまた彼個体としての性質なのかは不明だ。

船の中では操縦士に忠実にすべきだと言うことは誰でも知っていることだ。そこに順序はない。言われた通りに、M.I.A.の座る操縦席の背後にある椅子に座ってベルトを閉めた。この船は小さいが故、部屋は操縦室コックピットしかない。操縦席の後ろに二席の椅子があり、同席する人間はここに座るのだ。

「じゃあ、行ッくよー！」

その掛け声と共に船は急速にスピードをあげ、滑走路を駆け抜けて航空区から勢いよく飛び出す。本来であればナビゲータが出口まで導くのだが、そんなものはM.I.A.に必要がないようだった。

「おいおい、お前、イカれてねエか？」

籤が背後から叫ぶように言うも、M.I.A.は楽しそうに笑う。

「えー！ だって誰かに指示されて出ていくのってメンドクサイじゃん！ どの航路が良いかとかどの角度が良いかとか、僕に任せて欲しいね！ って言うか、ここに座ってるから当然だけど、僕普通に煉獄の操縦士試験受かってるし。許可貰ってるし」

「そりやそうだろうし、お前が一発合格のすげえやつって聞いているが」

「あはは！ もう僕の優秀さが煉獄内に届いちやった？ 届いちやった？ いや、優秀なのってそれはそれで困るよねえ！」

聞いていた通り、確かに性格に難あり、だ——籤はそう思わずにはいられない。いられないが、MIAは当然のように気にする素振りもなく、航海の予定を伝える。

「逸脱した曖昧は同エリアだから直ぐそこだもんね。単位時間の一時間くらいで着くと思えよ！」

その言葉に、籤は疑問を呈する。

「一時間？ こんなに近いのにワープホールでも使うのか？」

確かに、この周辺にはいくつかワープホールが観測されている。だが、ここ宇宙ステーション起源たる地と惑星逸脱した曖昧を繋ぐワープホールは聞いたことがない。最近生まれたのだろうか？

「え？ ワープホールやワームホールなんて使う筈ないじゃん」

まるで常識を疑うように言うが、籤こそMIAが何を言っているのか理解できない。

「いや、ワープホールとか使わなかったら何時間かかるんだよ」

「亜光速なら案外直ぐだよ？」

「は？ 亜光速……」

「まあまあのテクニクが必要だけだね！ 僕なら大丈夫！」

「良いのか？ ウル？」

亜光速は航海中に機体が分子レベルで歪む恐れがあるし、下手をすれば恒星の重力レンズで座標が狂って物理空間に迷い込む。何より、空間摩擦に耐えきれず機体が燃える可能性もあるが、今乗っているこの船はそれに耐えられるものだっただろうか？

籤はM.I.A.の静止をウルに求めるが、ウルは何が悪いかと首を傾げるだけだった。操縦士の言うことに従わない理由があるか？ と。それは、確かに正しいのだが。

籤が空を漂った台詞の行き場を思案していると、軽快な声がかき消す。

「ほらっ！ スピード出すよ！」

籤は結局「はあ」と溜息のような物を漏らしながら諦めた。

この船は煉獄所有の宇宙船としては小型だが、解らない程多くの機械が並んでいる。そしてフロントガラスやサイドガラスには真つ黒な宇宙空間が広がる。

隣のウルを見ると、彼は精神統一しているのかそれとも総帥と言う立場上、移動時間くらいしか休める時間はないのか、目を瞑って静かに存在している。ウルが信頼するのだ、自分も信頼しよう。籤はそう考えることで落ち着いた。

ウルは流石煉獄総帥である。この「性格に難あり」な人物を既に受け入れているように

思える。懐の広さも、トップには必要なかもしれない。

ともかく、一時間。それだけの時間があれば学習端末である程度の知識を詰め込む時間が取れるだろう。だが、籤は今回の視察について思考する時間とした。

煉獄専用クローン（十二進）。籤を始めたとした十一人のクローンである。オリジナルは「イチジ」と言うらしく、永久欠番である。彼の遺伝子を元にして、煉獄に安定的に優秀な人材を補充することを目的として十二進は存在する。

十二進はそれぞれ一時、三時、四時のように呼称され、その一人一人を「指針」と呼ぶ。クローン工場で作られたの指針は数字が割り当てられず、そのまま「指針」と呼ばれる。指針に数字が割当たるのは、その数字のクローンが死んだ時である。死んだ指針の経験を抽出し、新しい指針にその経験をインプットする。そうやって、十二進はそれぞれの指針として煉獄で役割を果たす。

指針に個は殆ど存在しない。彼らは煉獄の生きたパーツであり、煉獄の一部と言つてもいい。だから、指針は基本的に死を恐れない。

——基本的に、とはどういうことか？ 彼らも当然生物である。積極的な自己犠牲は行わない。だが、彼らは他の生物ほど死を恐れない。なぜなら、彼らは死んだ時、確実に次の指針へ経験を継ぐからだ。死への恐怖は、他の種族より小さい。

だが、彼らは記憶や人格を受け継ぐ訳ではなく、あくまでも経験を受け継ぐため、多少の個は存在する。例えば、現在の九時である籤と、一世代前の九時では微妙に性格が違

う。その少しだけある個が、死を恐れる。

九時は指針の中でも特に重要な指針であり、煉獄総帥の直属または本人が煉獄総帥に着任する。だから、総帥付きの九時が死んだ時、直ぐに新たな九時が補充されたとしてもすぐに気持ち切り替えられない総帥も過去には存在した。指針は常にストックされ、クローン保管庫で眠っている。だから指針の一人が死んだとしても、すぐに成熟した指針が補充されるのだ。

ここまでで、十二進が如何に特殊なクローンであるかは解るだろう。経験の抽出、圧縮、注入インストール。故に、その技術はこれから行くクローン工場しか持ち合わせていない。——その工場で、不穏な動きがあると言うのだ、複雑な気持ちになるしかない。

通報の内容はこうだ。——大規模闇市ブラックマーケットへ「快樂の再来」にて、惑星逸脱デイヴァイト・フアジーした曖昧産クローンの出品がここ数年で三倍になっている——と。

逸脱デイヴァイト・フアジーした曖昧はエリアーにある岩石惑星である。この惑星は美しい鉱石に溢れ、生息している生物はヒトも含めて生物と鉱石の混合物であり、特にヒト型種族を「逸脱の民」と呼ぶ。それらは蒐集家がいるほど美しく、大規模闇市のオークションで売買されることしばしばだ。この大規模闇市で売買されるものの多くは、逸脱の民やその他動物の畸型であることが多く、特に動物は逸脱デイヴァイト・フアジーした曖昧の空気ではか生きられないため、買い取られてすぐに剥製にされるらしい。

だが——ここ数年で売買されている逸脱の民は正常な生体であり——どうやらクローン

であるらしい。しかも——十二進の技術が応用されている可能性すらあると言う。

煉獄と提携している施設、しかも自分の生まれ故郷が犯罪に加担しているとは考えたくない。十二進の誰もが思うことだろう。

大規模闇市（快樂の再来）。

闇市と称されている通り、非合法の売買場である。正義を掲げる煉獄として、放置しておくのだろうか——と思うかもしれない。大規模闇市に煉獄が介入しない理由は明確に存在する。そう、この宇宙の秩序の制御下に置くためである。完全に潰すよりも泳がせておいた方が管理しやすいし、この大規模闇市は煉獄隊員だからと言って入場が拒否されることもない。快樂の再来の中は、宇宙律の内部にありながら、別の秩序を保っているのだ。欲望渦巻くこの場所は、宇宙社会の裏情報・禁制技術の集積地となっている。煉獄としては、情勢把握に使えるし、潰せばより見えない形で広がるだけである。故に、野放しの状態を維持している。

——と、そろそろ惑星に到着するのではと言う頃、ルネサクロスから通信が入った。通信は船の機材を通して、部屋全体に響き渡る。

『ウル、やっぱり今回の件、犯罪ギルドが関与している可能性が高いみたい。もしかしたら、クローン工場そのものが脅かされているのかも知れない』

「マーク済みの犯罪ギルドか？」

『ええ。最近規模が拡大した《紅牙機構》と名乗るギルドよ』

「機構とはまた大それた名を名乗るな」

ウルは少しだけ嘲笑する。

『最近快樂の再来の売り手側で参加するようになったらしいの。市場内のルールに従わなくて一度トラブルになったみたいだから、正直その——』

ルネサクロスが言い淀む。なんと表現したら良いのかと思っているのだろう。ルネサクロスは犯罪ギルドに対しても優しすぎるのだ。だから代わりに籤が答える。

「小物——つてことだろ？」

『そう、ね。一言で言えば』

「だが——」今度はウルが言い淀む。恐らく、籤と同じことを思っているのだろう。「だが、いくら最近規模が拡大したとは言え、そんな小物犯罪ギルドが、何故逸脱した曖昧のクローン工場を？」

その通りである。逸脱した曖昧のクローン工場と言えば先述もしたが、煉獄と提携している施設である。そんな施設を脅して不正クローンなどを製造させているなど、直ぐに煉獄からの処罰が下ることは幾ら小物であろうとも解るだろうに。

『そうなの。もう少し、調べるわね』

「よろしく頼む——もしかしたら……」

ウル言葉に、ルネサクロスは小さく頷き、籤は怪訝に首を傾げる。

『また、連絡するわ』

そうして通信を切った頃、丁度逸脱した曖昧の 대기圈に入っていた。

「逸脱した曖昧はそんなに特殊な惑星じゃないけど、揺れるから気をつけてね」

一応操縦士らしいことを言うんだな——と籤は思ったが、航空機や船旅に対して変なテンションであること以外は案外普通のやつなのかも知れないと思ひ直した。

特に気になるほどの揺れを感じず、逸脱した曖昧のクローン工場敷地内の着陸場に静かに降り立った。流石試験を一発で合格した優秀な操縦士だ。違和感がない。

「この空気は人体に毒になるようなものじゃないね。気圧も気にする程じゃない。うん、そのまま扉を開くよ」

当たり前なことだが、毎回確認するのも優秀な操縦士らしい。全てに気を抜かないことは優秀な証拠だ。

「ご苦労。暫し待機をよろしく頼む。この惑星には来たことがあるのか？」

M.I.A.が勤めているクロノ・トラベル社はその名の通り旅行会社である。様々な惑星を飛び交い、人を運送しているはずだ。

「一度、この惑星の都市——珍しいよね、惑星名と都市名が同じなんて。しかも一つしかないって。そのデイヴィアント・ファジーには何度か行つたよ。ここは治安も良いし、大人しく待機してるから大丈夫。ただ、この星の性質上、密猟者がそれなりにいることは理解してる」

M.I.A.のその言葉に、ウルは微笑する。

「認識の齟齬がなくて何よりだ」

視察と言う体であるが、定期視察とは異なる時期に総帥と総將軍がやってきたのだ、当然のようにクローン工場は慌てて対応をする。

「――何が、あつたのですか？」

このクローン工場に煉獄の船が泊まることは珍しくはない。それでも工員たちは不安がるだろう。ウルと籤は早々に応接室に通された。

工場長は代替わりしたばかりだ。五年前、ディア・ローズ起源たる地に挨拶をしに来たことを覚えてゐる。彼は逸脱の民としてはまだ若く――逸脱の民は大体地球人と同じくらいの寿命と成長速度である――戸惑いを隠せないようだ。

「久しいな、リオ・理・グラード殿」ウルが彼を見つめる。その瞳は冷たく思える。「単刀直入に聞こう。困り事があるのではないか？」

「――そ、それは……」

動揺していることは明らかだ。

ウルは畳み掛ける。

「上空から見たが、先代の時から建物が増えたな？ あれは何だ？ クローン工場は一般的にクローン製造エリア、成長・育成エリア、教育・プログラミングエリア、品質管理エリア、保管・出荷エリア、研究・開発エリア、そして倫理・法務管理エリアと施設が分か

れている。規模を拡大するならば、あのような離れた所に造ることもなかるう。新たな施設を増設するのなら、それは研究目的となる。その場合は煉獄に報告が必要なはずだが」それは、正しく断罪の言葉だ。——あの建物は、犯罪組織が使っているのではないか。ウルという言葉にはその言葉が含まれている。

「その——あの建物は、工員の生活用の建物でして……。最近、この惑星で星外からの密猟者が増え、都市全体で経済的ダメージを負っている状態です。行政の方で対策は進めているとの事ですが、その、住み込みの方が良い場合もあり」

しどろもどろに続けるリオ氏はチラチラと天井に視線を向ける。隠し監視カメラでもあるのだろうか？ 誰かの眼を気にしているように思える。紅牙機構コウガと言う犯罪ギルドは、小物のように思えたが、最近規模を拡大したと言うくらいだ、もしかしたらこの工場のようにトップが入れ替わり、急速に発展したのかも知れない。

「ですが、十二進の卸しは滞りなく。今も二体の指針を保管中ですので、煉獄にはご迷惑をかける事はないかと」

「解った」

ルネサクロスからの報告の通り、工場は恐らく犯罪ギルドに脅されているのだろう。あんな建物まで造らされて。一体何の弱みを握られているのだろうか。リオ氏個人の問題だろうか？ ——そうかも知れない。確かに、異変は工場長が交代してからだ。

「念の為、増設された施設を見学して良いか？ 籤、お前は折角だから工場内を見てきた

らどうだ？ 我々が揃って工員の居住施設に顔を出すのは少し不審がられるだろう」

「お？ まーそうだな。この工員たちは俺の親みたいなものだし、みんなに挨拶してくるかー」

十二進が工場内に居ることは不思議ではないし、基本的に生まれてから数年はこの施設と都市デヴィアント・ファジーで生活をする。顔見知りも多い。

「そうですね。九時は皆に顔を見せてあげてください」

三人は立ち上がり、それぞれ、リオ氏とウルは新設された建物へ、籤は工場内部へと向かう。——工場内部へ向かう籤には、ウルから内部の調査が指示されるのだった。リオ氏には気付かれぬよう、静かに耳打ちする。

ウルは道すがら、リオ氏から新設された施設についての真実を聞いていた。やはり新しい施設は犯罪ギルドの根城であり、そこに棲みついているのは犯罪ギルドの人間であると言う。ウルが察した通り、応接室には監視用のデバイスが設置されているようだ。外であれば、その監視デバイスの手は届かない。監視用ドローンが飛んでいる様子もない。

「もしかしたらその通報も我が社の工員からかも知れません」

「煉獄として長らく気付けなくて申し訳ない——、一応、中の造りは居住施設のようになっているのだな？」

「はい、ですがそれは見かけだけです。左右に三つずつ部屋があり、その奥の扉を開ける

とホールになつています。そこが、彼らの活動拠点です。二階までは同じように部屋があります。三階へ行く階段はダミーです」

「了解した」

ウルは自分がホールに入つたら建物の外に逃げるよう伝え、件の施設へと踏み入る。

——愛刀を、スラリと抜く。

ウルは、破壊神とも言える強さを持つている。籤たち十二進の経験をもつてしても、ウルのその強さに敵わないのだ。どれほどの、どんな経験を積めばそのような強さを身につけられるのだろうか。ウルのその強さも、煉獄隊員たちから敬愛される一因である。

ウルは扉を開けた瞬間、わずかな空気の歪みに反応する。天井の梁に設置されていた簡易式の銃座が作動し、鋭い音と共に光弾を放つたのだ——侵入者用の、トラップ。

こんなトラップが有効だとも？　そう言うようにウルは不敵に笑い、愛刀で光弾を弾き返す。

「良い歓迎だな。俺が煉獄総帥ウルファルト・ゼノファスだと知つていての狼藉か？」

ウルの声がホールに木霊する。

ホールはその名の通り天井の高い広い空間となつており、そこにはあらゆる犯罪の証拠が積み上がつていようように思える。人身売買、違法薬物、軍事機器——。

ここはそれほど安心できるアジトだったのだろうか。否、確かに数年は煉獄に気付かれなかったのだ、大規模闇市で調子に乗らなければよかつたものを。

「俺に刃向かえばただじゃあ済まない。大人しく逮捕されることをお勧めするが」
シン——と静まり返る空間に、「だつてアイツ一人だろう？」と小さな声が聞こえてきた。——統率が取れていない証拠だ。ここにギルドの長は居ないのだろう。

四方から、銃を構える音が聞こえる。

——一瞬の沈黙ののち。

「射て——!!」

鋭い声がホールに響き渡つた。

その号令と同時に、ホール全体に閃光と轟音が乱れ飛んだ。天井から、壁から、床の隙間から。いくつものトラップを仕掛けているようだし、人間が直接ウルを狙つてもいる。

だが、此処は彼らの拠点であり、商品保管庫である。それを考えれば銃弾が飛んでこない場所などすぐに推測が付く。死角も多い。

ウルは物陰に隠れ、忍び寄り、一人ずつ確実に気絶させてゆく。滑稽なことに、彼らは自ら生み出した轟音と煙により視界と聴覚を奪われているようだ。小物たちだと思わずには居られない。

(施設規模の割には人員が少ないな)

確認できただけでも十五人程度しか居ない。侵入者にはトラップを充てることが前提の簡易拠点なのだろうか？ それとも——。

ウルが既に半数を気絶させ、トラップも殆ど打ち尽くされたよう段々と音と視界が晴

れてきた。ウルは圧倒的な強さに、意識を保っている者たちは息を呑む。

視認できる何人かが、ウルを確認しながら後ろに後ずさる。

当然、それを見逃すウルではない。

「愚かな。逃げ道も予測済みだ」

ウルが刀剣を一振りすると、トラップが作動する。どうやら、此処のトラップは物理的なレバーでも作動するようだ。発動したトラップが逃げようとしたギルド員の足を貫く。

——いくつかの、鈍い悲鳴が聞こえる。

圧倒的だ。

「動くな、降参しろ」

ウル言葉に、既に戦意を喪失したギルド員が銃器を下ろし、手をあげて降伏の意を示した。ウルはホールを見渡して、都市デイヴィアント・ファジーにある煉獄支所に連絡を入れる。

「犯罪組織紅牙機構の拠点を制圧した。人員は十五名程度。回収を頼む」

事前にルネサクロスから連絡があったようで、デイヴィアント・ファジー煉獄支所の隊員は既に近くで待機していたようだ。ウルが連絡すると間もなくやってきて、犯罪者たちを次々と捕縛していった。

「リーダー格の人間は不在のようです。あくまでも、作業員が此処にいるだけのようで」支所長が回収作業を見守りながらウルに囁く。

「ふむ……」ウルは唸り、続ける。「この施設と犯罪組織のリーダーが生きている限り、また同じことが起こるかも知れん。——だが、俺が思うに……まずは偵察させていた籤の報告を聞こう」

そう言つてウルは籤に連絡を取る。その瞳は、しつかりとリオ氏の影を捉えた。リオ氏の影は、この惨状から遠ざかる。

籤と何度かやり取りをした後、ウルは一言、支所長に告げる。

「——煉獄支所長、クレイド氏。此処は任せる」

戦闘中、リオ氏が建物の影からウルを窺っていたことは確かだ。その影はひっそりとどこかへ向かう。リオ氏は後ろめたい事があるとでも言うように——あるのだろう——人目を気にしながら敷地内を歩いて自らの部屋へと向かつているようだ。途中、工場の横を通る時。

「残念だなあ」

そこに立ちほだかるのは、籤だった。

「く、九時。どうしたんですか？」

「いや、そりゃあこつちのセリフだろ。ウルと工場長が向かった場所から銃声がするし、この惑星の支所の隊員だつて出動している。それが俺の耳に入らない訳がないだろう」

籤たち十二進にとつて、工場長は一番信頼できる親であるはずだ。悲しみと落胆が籤を

襲う。

「——墮ちたな」

リオ氏が振り返ると、そこには当然のようにウルが立っていた。

「総帥殿——！」

ウルは愛刀を突きつける。

「籤に情報を集めて貰ったが——何と杜撰なことか。此処が己の城だと高をくくっていたか。いや、それにしても見事な情報操作と言えよう」

始めからおかしいと思っていた。

煉獄提携クローン工場が小物とも言える犯罪ギルドの言いなりになるなど。

籤が悲しそうに、悔しそうに言葉を発する。

「だが——と言うか、やつぱり此処が自分の安全圏だと思つてたんだろなア……工員たちに聞けば、工場長の動きは変だ。おかしい。工員たちも信じたいんだろな……」前の工場長と比べると、つて言つてくれてたよ。『作業時間中に部屋に行つても居ないことが多い』とか、『自分たちと関わりを持たなくなつた』とか。工場長。貴方は所謂先代とは血の繋がりのない個体——世襲した訳ではないから、やり方がある程度変わることは理解すると彼らも言つていた。だが、変な建物は建てるし、『資金援助をするから例の建物に住まないか』などと言つてくるなど、不審がつていた。このみんなはいい人たちだ。俺は知つてる。——貴方は、煉獄だけでなく、彼らをも裏切つたんだ」

「——ッ！」

「そう——」ウルは静かに、罪を暴露する。「工場が脅されていたんじゃない。貴方が、彼ら紅牙機構を取り込んだのだ」

リオ氏は、何も答えなかった。

それは、ウルという言葉が正しいことの証明に他ならない。ウルと籤が応接室に通された時の振る舞いは、すべて演技だったのだ——。

一瞬の沈黙の後、ルネサクロスからの通信が入った。

『ウル、籤。紅牙機構のリーダーの画像を送るわ。幾つかは形状変化シェイプソフトした姿みたいだけ
ど——』

ルネサクロスからの通信と共に、それぞれのデバイスに画像が転送されてくる。

そこには全く姿の違う人物が映し出されているが、それがは全て同一人物だと言う。その中に。

「ありがとう、ルネ」

声に出してウルは答える。

そして、リオ氏へと視線を向ける。

「紅牙機構のリーダーが最近交代したとの情報だ。貴方は、紅牙機構を乗っ取ったんだな？　そして彼らを手足として使い、大規模闇市ブラックマーケットで荒稼ぎをしていたと言うことか」

「しかも十二進おれたちの技術を使ってるってことは——初期記憶操作か。売りに出された時に抵

抗せず、従順なる生体——需要があるだろうなア」

この惑星にもいくつかのクローン工場がある。その中でもこの工場のみが——広い宇宙の中、この工場のみが——煉獄と提携しており、惑星の中では最大規模を誇る。逸脱した曖昧産のクローンと言えば、この惑星固有の生体と鉱物が混合した生物が商品になり得るのだろうが、十二進の技術が使われている可能性がある——となれば此処しかない。

十二進は宇宙社会発足から四億年後、今から二十二億年前より続いてきている。その二十二億年の経験を全て凝縮してその脳に記録している。その技術はこの工場にしかない、門外不出の技術なのだ。それを応用して、都合の良い記憶を植え付けたクローンを造って売っているのだろう——。

「さぞかし——高く売れるのだろうな」ウルの冷たい視線が工場長——否、紅牙機構のリーダーであるリオ氏を貫く。「何故？」

その言葉に、何かを観念したかのようにリオ氏はため息を吐く。

「この工場は、今までずっと、世襲制でした。同じ遺伝子の連なりから成る組織、それがこのデイヴィアアント・ファジー・クローン工場です」

デイヴィアアント・ファジーにある最大のクローン工場。故に、宇宙社会全体から捉えた時に、「デイヴィアアント・ファジー・クローン工場」と呼称する。

リオ氏は続ける。

「私は、甚だ疑問なのです。遺伝子の繋がりに因る生物の存続が。遺伝子の繋がりがあ

ことによる信頼感が。——私は、十二進が哀れだと思ふのです」

それは、どう言うことだろうか？

ウルも籤も——リオ氏の独白とも言える言葉を静かに聞く。

紅牙機構の面々が連行されて行く雑音も、周囲の自然音も——まるで耳に入つて来ず、彼の言葉だけが辺りを支配しているようだった。

「ヒトは遺伝子に縛られているように思える。何故子を産み、何故慈しむのか。自らの命よりも何故子を優先するのか。それは遺伝子——つまり個とは種を存続させるための器でしかないからでしょう。ですが、私たちには意思がある。私たちは、私は、死んだらそこで終わりなんです。無になり、何も残らない。それを——是とするのが種です。そして十二進は無理矢理作られた種であり、クローンは遺伝子を受け継ぐだけの生命に過ぎない。哀れだ、あまりにも哀れだ——ここで働き始めて暫くして、私はそう思つたのです。そう、私は最初はこの工場の工具でした」

リオ氏は、自らの思想を、語る。

「私は、個を重視しないものを悪のように思うようになったのです。種のために生きるなど、哀れではないですか。ねえ、籤。貴方は何のために生まれたのでしょうか。煉獄のために生まれて、死ぬことが、本当に正しいのでしょうか。——そう作られているから、貴方はそうだと思うでしょう。でも——」少しだけ言い淀んで、リオ氏は続ける。「だから私は、クローンそのものに反対する考えを持ちました。だから、この工場を——廃止したい

と、十二進と言う種を、滅ぼしたいと」

「クローン工場を廃止させたいと？　ここが犯罪組織の根城になったとして、煉獄が他の工場と提携するまでだ。十二進は門外不出の技術と言えど、研究資料として保管されているだろう。貴様の目論見は、杜撰すぎる」

ウル言葉に、リオ氏は笑う。

「資金がある程度貯まって、私がこの惑星以外で生きられるようになったら、この施設を研究資料ごと爆破でもして去ろうと思っていましたよ。研究資料は、正しく門外不出の子相伝。それごと、十二進という種族を絶やしてあげようと思っていました」

「なんと利己的な」

ウルが吐き捨てるように言うと、リオ氏は攻撃的な口調になる。

「利己的なのはどちらでしょう？　十二進と言っても一つの命です。それを、宇宙の正義のために――まさに使い捨てじゃあないですか。それこそ、十二進を絶やすことは、私の正義です」

「それを正義とは言わない」ウルは突きつけていた愛刀を更に近づけ、強い口調で続ける。「自らの思想を暴走させた上、この宇宙社会の正義の基盤となる煉獄、その重要な十二進を排除しようなど、秩序ある宇宙社会の妨げになる事必至である」

リオ氏の思想は、一種正しく、一種救いなのかも知れない。けれども、あまりにも利己的すぎる。十二進は正しく、正義の基盤なのだ。

正義が無ければ、この宇宙社会の秩序は崩壊する。その先に待つのは、混沌。リオ氏は諦めたように空を見上げる。

「終焉権——私は、十二進は、死によつて救われる存在だと思ひますけれどね」
「それを決めるのは本人だ」

二人の視線が籤へと集中する。

二人の、それぞれの期待は解つてゐる。その上で、籤は自らの意思で発言するのだ。正義の為に生まれるクローン十二進の一人として。

「俺は、煉獄の為に生まれて死んで経験を受け継ぐクローンだ。それ以上でもそれ以下でもない。俺には少なからず個としての自覚がある。それが全てだ」

十二進と言うものは、そう言う種族なのだ。そう言う価値観なのだ。そう言う文化なのだ。その中で、生きてゐる。けれどそれ自体をリオ氏は「哀れだ」と思うのだろう。

「十二進を絶やそうとするなど、重罪である」

ウルが静かに言うと、リオ氏は諦めたようにため息を吐く。

納得いかないのだろう。

けれども、彼の所業は——少なくとも今、この宇宙社会では悪としか言いようがない。

「正義を執行する」

煉獄総帥ウルファルト・ゼノファスの名の下に、正義は執行される。

煉獄の基盤を脅かす重大犯罪である。

リオ氏は脱獄不可能と言われる、煉獄所有の監獄 屈折する監獄へと送られた。

「戻った」

クローン工場に停泊していた船の外部スピーカーに向かって戻った旨を伝えると、

「はい」と言う気が抜けた声がしてすぐに扉が開いた。

壮絶な仕事の後に聞く声にしては不適切な気がするが、M.I.A.は何も知らないのだから仕方がない。

「待機、ご苦勞だった」

「ありがとう！」

小型の船であるため、本当に船内には何も無い。自分たちが外に居た間、M.I.A.は何をして居たのだろうか？ と籤が彼の手元を見ると、M.I.A.はしきりに操作盤を弄っている。

「壊れたのか？」

少し不安そうな籤の言葉に、M.I.A.は何故かギクリと言う効果音が聞こえそうなほど驚いた。そして申し訳なさそうに、だが好奇心の宿った表情で言うのだった。

「ええと、珍しくって」

「？ お前、煉獄の操縦士試験受かったんだろ？ その時の船と違うのかよ？」

「んー」とM.I.A.は考える。素人にどのように説明すればいいのかと言うように。

「まあ、船の大きさによっても違うし、何せ僕、一発で受かつちやったからさ。一応、こ

の型式の船も試験の時に一回だけ乗ったよ。一回だけ」

「は？」

「だからさ、今のうちに凡そ把握しておこうって思つて」

「お前……そんな船に煉獄総帥を乗せてたのかよ……？」

「でも！ でもそこらへんの操縦士より全然安全安心に運べるよ！ これでもクロノ・トラベルではかなり顧客満足度高かつたんだから！」

はあ、と籤はため息を吐く。

ウルを見るが、矢張り何も気にしていないようだ。彼は自分の手足となる煉獄隊員を——全て——確実に信頼しているのだ。

籤はそれが解つていながら、それでも呆れた瞳をM.I.A.に向ける。煉獄総帥を乗せた船が事故に遭うなど前代未聞だ。そうならなくて本当に良かった。そう思うと同時に、二度目の操縦で此処まで完璧に操れるのだから、矢張りM.I.A.は優秀なのだろう、と思うようにした。

「取り敢えず、事故なくて良かったぜ。帰りも安全運転で頼む」
「勿論！」

完璧に安心はできないが、M.I.A.の腕前を信じるしかない。

籤はやつと落ち着いて、フロントガラスから逸脱した暖味デヴィアント・フアジーの風景を見た。ラピスラズリのような美しい青い空。遠くには美しいアイオライトの丘が見える。——彼は、リオ氏は

この故郷の惑星をも憎かったのだろうか――。

「暗くなる前に出ちやうね」

M.I.A.はそう言って、二人が体を固定させたことを確認してから船を出発させた。

機体が静かに宙を走り出す。

「しっかし、十二進が哀れ――か」籤は自分の中で考えていた事が自然と口に出ていた。

「当然、俺はそう思わないが、人によつてはそう思うのかね」

「思想も思考も理想も、人によつて違うからな。だが、彼は正義ではなかった」

ウル言葉に、M.I.A.が反応する。

「何があつたの？」

M.I.A.のその言葉は、ただの好奇心であるとは思えなかった。

だから籤は、飛び立った惑星で起こった事の顛末を掻い摘んでM.I.A.に伝える。

「んー！なるほどお！それは難しいね！」帰路はゆっくり帰るつもりなのか、亜光速のスピードは出さずに船を走らせながら言った。「それこそ、種族によつて色々と考え方は変わるよね。例えばさ、僕つてば「G」族なんだけど、一応繁殖能力はあるし個体数が少ないからこそ雌雄同体――両性体に進化して、出会ったら繁殖できるような体になつて。で、僕らは液体生命体だからさ、繁殖して子供ができたとき、その子供つて本当に、親である二つの個体の融合体なんだよね。他の人種はさ、親個体の遺伝子を組み合わせてコピーして、そのコピーにランダムにミスがあつて別の個体になるじゃん？僕らは、た

だ混ざり合うだけなんだよね。多分、個体数が少ないからミスとかエラーとかがないようにって進化したんだと思うんだけど。それからもうほぼ進化なんてしないよね」

「A族は過去I族と混同されていた種族だ。また、I族は正確には生命体ではなくただの知性を持った物質である事が判明し、今ではE有機知性と呼ばれている。A族の繁殖方法は、確かに特殊である。

「だから——うーん、十二進のあり方——個体の生死と種の存続かあ」
M.I.A.は考えたことがないのだろうか？

「様々な思想がある中、画一した正義を貫くのは確かに難しい。我ら煉獄は正義を掲げるが、そのエリア、種族、状況によって正義は異なる。これは確かM.I.A.の代目の煉獄総帥が作り出したものだったはずだ。各エリアの将軍たちの判断を重視するようになったのはそのためだと聞いている」

「なるほどねー」

「我ら煉獄は正義を確定させる。それが責務だ。そしてその責務を負うのは、煉獄総帥である俺だ。今回の件に関しては、十二進と言う煉獄の中核を成すシステムが関わっていた事件だったために俺が直接判断したが、彼は決して、正義ではない」

「どんな種族のどんな思想があったとしても、煉獄が正義だと判断すれば、それが宇宙の正義になるのだ。だからこそ、正義の判断をすることは各エリアの将軍たちだが、その正義の最終責務は、煉獄総帥であるウルにある。」

「俺たち十二進は煉獄の為、宇宙の正義の為のクローンであり生物だ。そもそも生殖能力だつてない訳だし、人為的な種族だつてことは理解している。十二進に個はないと言つていい。死んだら新たな指針が九時おれになるだけだ。だが——まあ、工場長だつたあの人の主張も解らんでもない。やり方が間違つていただけだな」

ヒトは人として意識を確立した時から、個と種の狭間で葛藤して居るのかもしれない。死を恐れる生物は多い。

フロントガラスから広大な宇宙が見える。見慣れているその光景も、その光景の中にある星々は異なるはずだ。だが、それらは光の粒にしか見えない。その光の粒の中に——様々な生き物がいて、様々な思想を持ち、正義を展開して居るのだろう。

一瞬の沈黙が支配した時、ウルに通信が入った。

『ウル、籤、ZIN。お勤めご苦労様。殆どは支所の方で対応が出来るみたいだから、あとは任せちゃつて大丈夫みたい』

「了解した」

『で、本題なのだけれど、中枢議会のレオン・ヴァスキール氏から——秘書のメナ・アスフォデル氏を通じて面会の依頼があつたわ。お疲れの所申し訳ないけれど、戻つたら対応をお願い』

「レオンから？ そう言えば最近連絡を取つていなかったな」

中枢議會——この宇宙社会の意志を決定する機関である。その最高議長であるレオン・

ヴァスキール氏はウルの友人である。宇宙の秩序を護る二つの機関、中枢議会と煉獄のトップが懇意であることも、今の宇宙社会が正しく秩序を保っている要因の一つかもしれない。

「要件は？」

『——宇宙科学研究ギルド《背神の集い》が惑星感情の擬態化への生態調査申請を出しているみたい。いかにも怪しいから監視して欲しいとか……』

「なるほど」

感情の擬態化はエリア八にある岩石惑星である。多くの人型種族に有害な気体が充満しており、この惑星に棲みつく人種は一つを除いて存在しない。その人種とは昆虫類人種である。一億年ほど前から、この惑星は昆虫類人種の一つ、霧虫族が占拠していたはずだ。一つの大きなコロニーと、複数の小さなコロニーが点在している。

「生態も何も、感情の擬態化には霧虫族しかないだろう？ 確か女王制で、最大のコロニーでは代々『ネフィル』と言う名を受け継ぐと聞くが」

『そうね。私の認識もそうよ。だからこそ、レオン最高議長は背神の集いが何を調査するのか怪しんでいるんじゃないかしら』

「ふむ」

背神の集い。彼らは数多くの研究成果を残し、宇宙社会の発展を担っていると言ってもいい。彼らの研究成果は、各種企業やギルドへ卸され、有効に活用されている。だが一

方、行き過ぎた研究もあることは確かだ。——彼らは神に背き、知識欲を最優先とし、倫理と道徳を越える。

「概要は理解した」言つてウルはM.I.V.に尋ねる。「どれくらいで起源デイヤ・ローズたる地に戻る?」

「急ぐなら、あと三〇分で行けるよ!」

楽しそうな声色に、ウルは笑い、籤は呆れた表情を呈する。

「では、お願いします」
「イエス・サー」
「了解!!」